

てあげ、あのソレ……何……小父ちゃん大きな眼を開いてるさかい厭や、何を云ひくさる。コレそ
ないに身體を振るもんやない」

「へエ坊ンは唄がお上手で、そんなら小父ちゃん眼をつぶつてますで、聞かしとくなされ」

「それ小父ちゃん眼をつぶつてなさる、早う歌はんかいな、何んやつたいな、野毛のかいな、野毛
の山からノオエかいな、野毛の山からノオエ鐵砲サイサイかいついで小隊進め、やつたかいな」

「甚い坊ンは老おきなくろしいお聲で」

「鶴さん、今のは私じや、ワハ、、、」

「叔父さんも仲々お上手で」

「うだく云ひなさんな、孫にかゝつたら薩張りわやぢや、時に鶴さん、御飯は如何ぢや」

「只今途中で食べて参りました」

「そんな事をせいで私處で食べたらいのに、そいで何か、兄さんに逢ふてやつたんか」

「まだ兄の宅へは寄らずで、直ぐ御當家へ参りましたので」

「ア、そうか、兄さんは相變らず精出して働いて御座る、併し鶴さん、此の町内も随分變つたで」

「そうで御座いますか、只今も町内を通つて参りましたが、あの糸屋さんのお宅がコロツと變つて居
りましたが」

「糸屋さんか、あのお宅は甚い御出世ぢや、今横町へ地所を買ふて立派な御普請をなさつて、御家族
は上下かけて二十七八人は御座るさうぢや、何でも生糸で仰山儲けなしたのぢや」

「へエ、あの播磨屋さんは」

「播磨屋さんは今心齋橋筋に店を出して、仲々繁昌して御座ると聞いてます。それに引き替へ相變ら
ずつまらんの私處ぢや」

「御冗談を、これだけの店を張つて御座るのに」

「アハ、、、私はモウ隠居して店は新之助にすつかり譲りましたが、宅の新之助は相變らず、沈香
も焚かず、屁もこかずで、唯店を守つてると云ふだけぢやアハ、、、」

「それに、あの角の雜穀屋の雜穀八さんは……只今通つて参りましたが、店が小さく仕切つて變つて
居りますが、何處かへ宅替へでもなさつたのですか」

「鶴さん、人の家の滅亡つぶれるのは早いもんやで、四丁界隈切つての金持と云はれた雜穀八さんも、三年經
ぬ間に箸一本無い様になつた」

「へエ、雜穀八さんはあの様に堅いお方、お婆さんは女の事、他は娘さん一人、他に潰す者は無い
はづ、ハ、ン、こら誰か外から潰した者があるのですな」

「鶴さん、お前豪い事を云ふた、そうぢや他に潰した者があるねん」